urban regeneration

-新しく生まれ変わること-

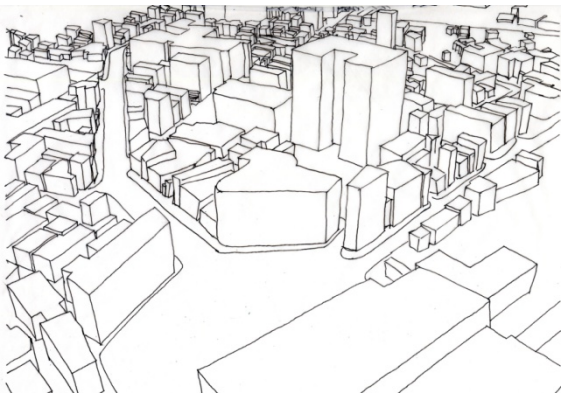
0814105 前田　貴也　(指導教員:八尾　廣)

1:はじめに

日本の多くは地方都市において駅駐車場の増加により駅前の街並みが壊れている。そうした都市に風景と動きといった力を与え、再生する試みを行いたい。

潜在的に眠る都市の力を再生し蘇らせることに真剣に向き合いたい。それが、本卒業設計の動機であり、テーマでもある。考えるきっかけとして、以下の 6 つの目的を設定した。

1, 文化財保護・2 地域商業活性化・3, コミュニティ活性化・4, アメニティ向上・アイデンティティの保護・6, 環境保全管理



2:日本の都市づくりにおいて

都市の地相、形相はまち割りも含めて、都市の様々な諸機能の配置、規模を決定するのに重要な役割を果たしてきた江戸の初期の都市づくりにあらわれた社会階層別によるモデュールに従った強い概念的な計画性も常に部分に限定され、全体としては自然の相に従うというバランス感覚を重要視することによって日本のまちはユニークな都市構造の基本理念を獲得していった。こうした経緯を尊重した設計を行うことを副テーマとして揚げた。

3:敷地設定について

敷地としては小田原市街を選定しました。

神奈川県の西の玄関口である。

小田原は交通機関などの地域交流拠点になっており自然立地と温暖な気候に恵まれている市域は現在も富士、箱根、伊豆という国際的な観光地の広域交流拠点都市として繁栄している。また、「小田原城」や「かまぼこ」などの職人たちに対する歴史が古く残っているまちでもある。しかし、このまちは観光拠点として通過する人々が多く、活気があるのは駅のそばの商店街くらいであり、本来のまちの魅力が見過ごされている。

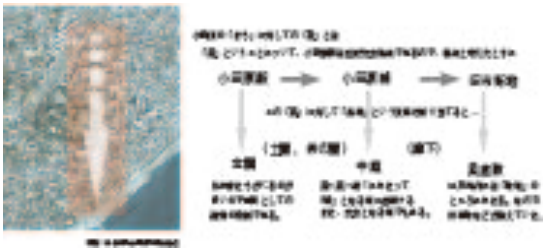
有名な小田原城でさえその場所が十分に認知されているとは言い難い。

4:計画の方法

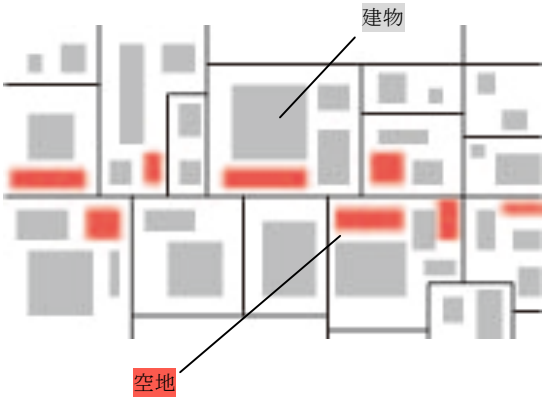
・小田原市街は増えつつある駐車場などの空地に着目し、これを対象とした空地に＜目的＞を一つ一つ配置していくことにより人々を「奥」へと導きだせるのではないか。

ここでいう「奥」とは、日本の建築空間の場合「長屋」が一般的なイメージである。

長屋は歴史的には伝統的な都市住居として広く見られる形態であり、かたちでは、玄関→土間→茶の間→中庭→座敷というように連続的に「奥」へと続く空間性が人々をまちへ引き込む計画に利用できるのではないか。



主なプログラムとしてオープンカフェの倍増・公園・緑化計画・展示場・フリーマーケット・コミュニティ活性化・フェスティバルやイベントなどを導入している。



・「石垣」による建築

小田原というまちの長けた思いをはせる時、コンクリートや鉄といった現代の素材はふさわしくない。小田原の歴史を見つめてきた「石垣」という素材に着目し用いることとした。

空地を緑取るように、あるいはそっと置かれるように石垣はその厚さを利用して、人々の様々な活動やコミュニケーションをサポートする。そして、長い年月を経て、それ自身、まちの歴史を物語る存在となってゆくだろう。

・「伝統的技法をもつ職人たち」

伝統的技法をもつ職人は数が少ない…高齢者が増えつつ、若者に伝統を伝えられない。そこで、職人とのワークショップを企画することにより情報発信を行い、小田原の歴史や文化、まちの魅力を伝える。

以上が私が行った計画の概要である。空地（駐車場や空き地）一つ一つの場所性と歴史性を読み込み、そこにあると良さそうなプログラムを挿入しつつ、要所、要所にオープンスペースやパブリックスペースを設ける。こうして活性化したかつての空地の連続により人をまちの奥へと導くことを試みる。